二十七話　牛方とやまおば

数なして人くうか、おべでらか。牛方と山姥のはなしっこだ。山姥というのは山にいる鬼女のことだ。このへんではやまおばといっている。

むかしむかしのはなしっこだ。

あるところにひとりの牛方があったけど。その牛方が牛ぼっていって山のなかさ、小屋っこさとまって、ままじっぱりたいてくっていたど。ままじっぱりたいたどこで、そのまま残ったけど。もったえねえなあと思ってやまおばさ、けだほえなと思ったど。

「やまおばやあーい。ままけらこーい。やまおば、ままけらこーい」

とさけんだど。したばやまおばむこうの山からガリガリと木をかき分けてきたど。

「そら、おれ、ままたいてくったどもあまった。おれや、えまでかけるし、もったえねえし、くわへる気になって呼ばったのだ。これけえ」

牛方がやまおばさ、けだば、それもガリガリとくってしまったど。してな。

「これればしこけるって、人、よばったのな」

といったど。牛方は、

「したたて、あとねえ。あまったのけるってさかんだのぞ」

といったど。やまおば、おこったと。くいたりねえがったべ。

「これればしこ、けるって、人、よばったな、うがもくってしまる」

としえたたえに、にゃ、くわえるがと思ったど。やまおばが

としえったど。牛方な、

「あと、なんにもねえし、ふだら、ほら、そこにべこえるたえにべこのきゃべでもくったらえべ」

としえたど。したばやまおばが、ガリガリとくってしまったどこで

「たえねえ。うがもくってしまる」

とやまおばしえったどこで、牛方な、おっかなくてにげて「かやしな」さ「べろっ」と入って、かぐれでいたど。かやしなってなむかしやどこするといえば茅野さいって、かや百もなんぼもがらっと立てておいたわけし。

そこさ、やまおばきたけど。

「なんでも、ここのかやしなのなかさ、へったはずだっけ」

としえながら、このかやな、どどどどっと百もたっていたかやしなをたおしていったど。

牛方はおれかぐれていたかやしなさ、あたってけねばえやとへこらへこらかぐれていたど。最後のひとつだというどき、べろりと牛方でてしまったど。やまおばしたば

「ここさ、かぐれてえだのな。ちきしょ。こりゃ」

としえって、牛方をごろりひっかずいてやまおばの家さ、へでえがえだど。

さきにひとりさらってえがえだ男あったど、牛方はその男ど、やまおばが疲れでいたのでやっつける相談したど。

さきにさらわれていた男が、

「おばあさん、おばあさん。きょう、石のからどさ、やすむどがんし、金のからどさ、やすむとがんし」

「あと、なもねえのな一

としえったど。からどというのは、床のことだし。石のからどというのは、石でできたねどこということになるし、したばやまおばが
「きょう。あたまあんべ。悪いたえに、石のからどさやすむ」
としえったど。男は石のからどさ、やすませだど。
しをば山姥は、ゴウゴウといびきかいてねったど。したどこでふたりは山姥を殺す相談したど。男が、
「山老いいあんべにねった。お前とふたりで山姥殺すべし。どして殺したら、えべが」
と言ったどこで、牛方が、
「やかんさ、どんどんと湯にだてて、ねってら山姥の耳うなさつんでやるべし、そせば死ぬごった」
と言ったど。したどこでふたりで火どんどんたいて、湯、にたてて、耳の穴さ、つんでやったど。したば山姥死んだど。したどもこのままおいでおぐど、また生きげえるだかどんだかわかねえし、やいでしまうべしということになってやくことにしたど。してそこらからたきぎじっぱり集めてどんどんとたいて、山姥入れて焼いだど。したばやまおばの灰が風がふいてきてゴーと飛んだど。そしてその灰が蚊になったど。それで山姥死んでも人を食うと言わえだど。どっとはらえ。